

劇場・音楽堂等機能強化推進事業
(劇場・音楽堂等機能強化総合支援事業)

成果報告書

(平成30～令和2年度 3か年分)

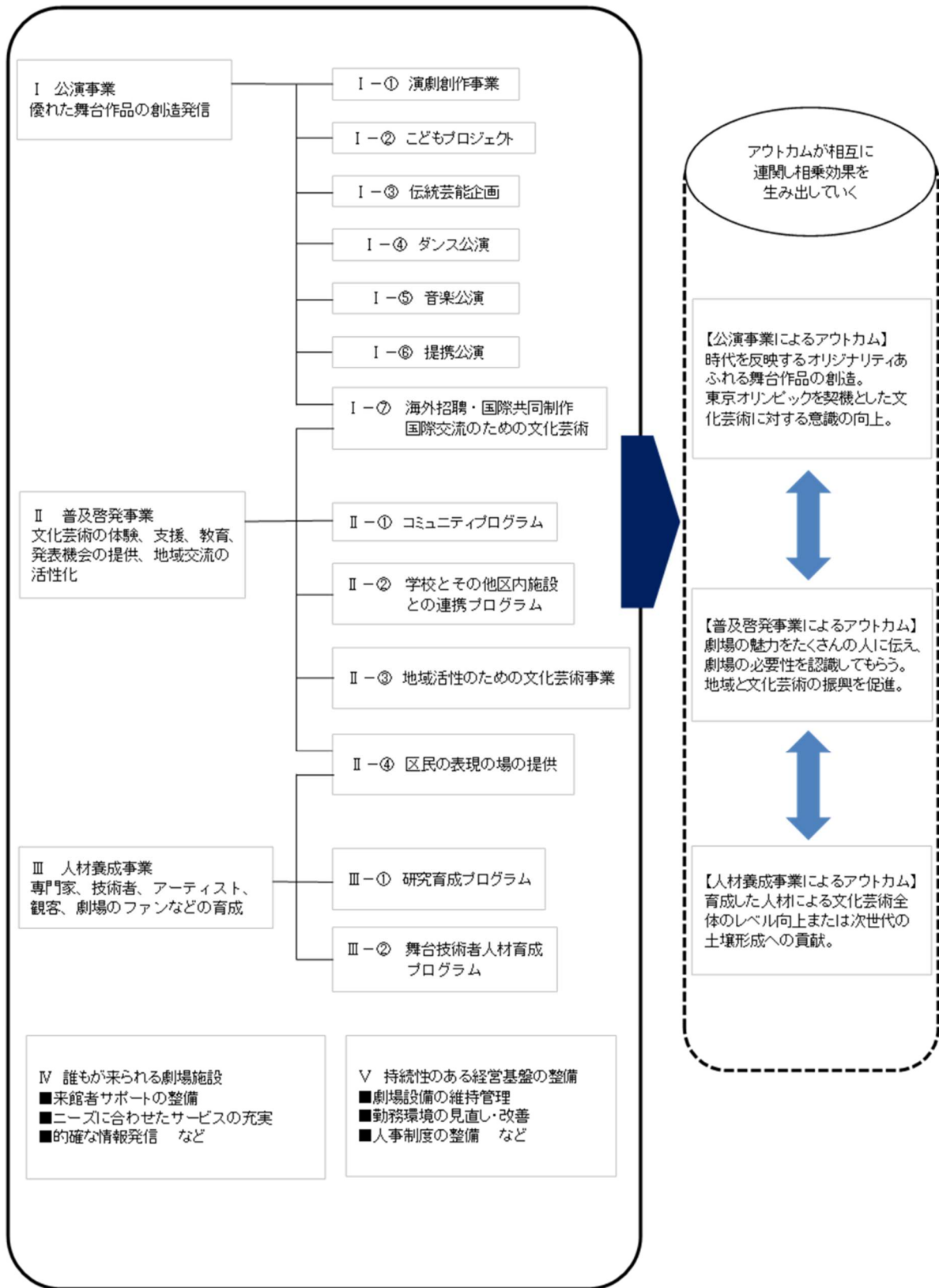
| | |
|---------------|---|
| 団 体 名 | 公益財団法人せたがや文化財団 |
| 施 設 名 | 世田谷文化生活情報センター (世田谷パブリックシアター) |
| 助 成 対 象 活 動 名 | 世田谷パブリックシアター 劇場・地域の文化芸術振興事業 |
| 助 成 期 間 | 3 (年間) |
| 内 定 額 | 平成30年度 57,613 平成31年度 54,177 令和2年度 53,078 (千円) |

1. 事業概要

(1) 事業計画の概要

全体図（概念図）

(事業名) 世田谷パブリックシアター 劇場・地域の文化芸術振興事業



(2) 令和2年度実施事業一覧

| 番号 | 事業名 | 主な実施日程 | 概要 (演目、主な出演者、スタッフ等) | 入場者・参加者数 | |
|----|---------------------------------------|---------------------------|--|----------|---------|
| | | 主な実施会場 | | 目標値 | 実績値 |
| 1 | フリーステージ | 2020年4月29日、5月3日、4日、6日(中止) | 新型コロナウイルス感染症の影響で公演を中止した。 | 目標値 | 3,000 |
| | | 世田谷パブリックシアター・シアタートラム | | 実績値 | — ※ |
| 2 | 移動劇場 @ホーム公演 | 2020年6月(中止)※ | 新型コロナウイルス感染症の影響で公演を中止した。 | 目標値 | 950 |
| | | 世田谷区内福祉施設等 | | 実績値 | — ※ |
| 3 | デフ・ウェスト・シアター | 2020年4月20日～4月26日(中止)※ | 新型コロナウイルス感染症の影響で公演を中止した。 | 目標値 | 720 |
| | | シアタートラム | | 実績値 | — ※ |
| 4 | 白井晃演出作品『ある馬の物語』 | 2020年6月17日～7月12日(中止)※ | 新型コロナウイルス感染症の影響で公演を中止した。 | 目標値 | 10,030 |
| | | 世田谷パブリックシアター | | 実績値 | — ※ |
| 5 | 栗山民也演出作品『殺意(ストリップショウ)』 | 2020年7月11日～7月26日 | 演出：栗山民也 出演：鈴木杏 | 目標値 | 2,400 |
| | | シアタートラム | | 実績値 | 1,316 ※ |
| 6 | せたがやこどもプロジェクト 子どもとおとなのための◎読み聞かせ『お話の森』 | 2020年10月3日、4日※ | 出演：ROLLY、片桐仁 | 目標値 | 1,100 |
| | | 世田谷パブリックシアター | | 実績値 | 627 ※ |
| 7 | せたがやこどもプロジェクト 海外招聘サーカス『悟空』 | 2020年8月6日、7日、9日(中止)※ | 新型コロナウイルス感染症の影響で公演を中止した。 | 目標値 | 1,000 |
| | | 世田谷パブリックシアター | | 実績値 | — ※ |
| 8 | せたがやこどもプロジェクト特別編 新奇席企画 | 2020年8月8日、9日※ | 出演：春風亭一之輔 他 | 目標値 | 1,020 |
| | | 世田谷パブリックシアター | | 実績値 | 451 ※ |
| 9 | せたがやこどもプロジェクト『Jazz for Kids』 | 2020年8月15日、16日(中止)※ | 新型コロナウイルス感染症の影響で公演を中止した。 | 目標値 | 800 |
| | | 世田谷パブリックシアター | | 実績値 | — ※ |
| 10 | 世田谷アートタウン 三茶 de 大道芸 | 2020年10月17日、18日 | 出演：アストロノーツ、オジロス、Kanauknot、芸人まこと、ブラックエレファント、加納真実、SUKE3 & SYU、STILTANGO、ゼロコ、中国雑技芸術団、ポールド山田 | 目標値 | 200,000 |
| | | 世田谷パブリックシアター 他 ※ | | 実績値 | 1,202 ※ |
| 11 | 世田谷アートタウン 海外招聘公演 | 2020年10月17日、18日 | 出演：カンパニー オクトーブル | 目標値 | 1,000 |
| | | 世田谷文化生活情報センター ※ | | 実績値 | 42 ※ |
| 12 | 森新太郎演出作品 | 2020年10月27日～11月23日※ | 演出：森新太郎 出演：小瀧望、高岡早紀、近藤公園、木場勝己、花王おさむ、久保田磨希、駒木根隆介、前田一世、山崎薫 | 目標値 | 9,204 |
| | | 世田谷パブリックシアター | | 実績値 | 17,885 |
| 13 | シアタートラム ネクスト・ジェネレーション | 2020年11月17日～11月22日 | 作・演出：一宮周平 出演：佐藤竜、辻本耕志、中前夏来、原扶貴子、瞳、一宮周平 | 目標値 | 1,008 |
| | | シアタートラム | | 実績値 | 744 ※ |

| 番号 | 事業名 | 主な実施日程 | 概要 (演目、主な出演者、スタッフ等) | 入場者・参加者数 | |
|----|--|---|---|----------|---------|
| | | 主な実施会場 | | 目標値 | 実績値 |
| 14 | 現代能楽集X 『幸福論』～能「道成寺」「隅田川」より | 2020年11月29日～12月20日 | 作：長田育恵、瀬戸山美咲 演出：瀬戸山美咲 出演：瀬奈じゅん、相葉裕樹、清水くるみ、明星真由美、高橋和也、鷲尾真知子 | 目標値 | 3,840 |
| | | シアタートラム | | 実績値 | 2,881 ※ |
| 15 | Technical Theatre Training Program 2020 舞台技術講座 | 2020年8月25日～27日、2021年1月24日、25日 | 講師：熊谷明人、柘植幸久、小笠原康雅、松本泰（TOA株式会社）、川北敏樹（オーディネイトジャパン）、関根菜純（ヤマハミュージックジャパン）、加茂優也（ヤマハミュージックジャパン） | 目標値 | 250 |
| | | 世田谷パブリックシアター・シアタートラム | | 実績値 | 141 ※ |
| 16 | 海外招聘ダンス公演 | 2021年2月8日～14日 | 新型コロナウイルス感染症の影響で公演を中止した。 | 目標値 | 1,000 |
| | | 世田谷パブリックシアター | | 実績値 | — ※ |
| 17 | コミュニティプログラム 『地域の物語』 | 2020年10月4日～3月11日、2021年1月30日～3月20日、3月21日 | 出演：阿部健一 有吉宣人 開発彩子 金川晋吾 とみやまあゆみ 花崎攝 山本雅幸、世田谷区内小学校3年～6年生 | 目標値 | 330 |
| | | シアタートラム 他 | | 実績値 | 108 ※ |
| 18 | こどものためのWS 『世田谷パブリックシアター演劇部』『夏休みワークショップ』 | 2020年8月3日～27日、9月20日、9月27日、10月11日、12月5日、2021年2月21日 ※ | 小学生、中学生、高校生向けのワークショップを実施。 | 目標値 | 270 |
| | | 世田谷パブリックシアター稽古場 他 | | 実績値 | 527 |
| 19 | 学校のためのWS 『ワークショップ巡回団』 | 通年 | 世田谷区内小中学校、世田谷区内施設でワークショップを実施。 | 目標値 | 5,000 |
| | | 世田谷区内小中学校 | | 実績値 | 1,466 ※ |
| 20 | 観客育成プログラム 『舞台芸術のクリティック』 | 2020年6月～2020年3月 | 新型コロナウイルス感染症の影響で事業を中止した。 | 目標値 | 160 |
| | | 世田谷文化生活情報センター | | 実績値 | — ※ |
| 21 | 世田谷パブリックシアター事業評価に関する調査 | 通年 | 外部機関による、劇場運営および事業評価のための調査を実施。 | 目標値 | — |
| | | — | | 実績値 | — |

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

(3) 平成31年度実施事業一覧

| 番号 | 事業名 | 主な実施日程 | 概要 (演目、主な出演者、スタッフ等) | 入場者・参加者数 | |
|----|---|------------------------|---|----------|---------|
| | | 主な実施会場 | | 目標値 | 実績値 |
| 1 | フリーステージ | 2019年4月28日、29日、5月4日、6日 | 出演:世田谷区民を中心とした約64団体 | 目標値 | 2,000 |
| | | 世田谷パブリックシアター・シアターラム | | 実績値 | 2,400 |
| 2 | 小山ゆうな演出作品『チック』 | 2019年7月13日～28日 | 出演:柄本時生、篠山輝信、土井ケイト、大鷹明良、那須佐代子 | 目標値 | 2,560 |
| | | シアターラム | | 実績値 | 2,902 |
| 3 | せたがやこどもプロジェクト コンドルズ 『Don't Stop Me Now』 | 2019年8月22日～25日 | 出演:コンドルズ 構成・映像・振付:近藤良平 | 目標値 | 2,416 |
| | | 世田谷パブリックシアター | | 実績値 | 2,342 |
| 4 | 世田谷アートタウン 三茶 de 大道芸 | 2019年10月19日～20日 | 出演:海外・国内のパフォーマー42組 | 目標値 | 200,000 |
| | | 三軒茶屋周辺、近隣商店街 | | 実績値 | 200,000 |
| 5 | 世田谷アートタウン 海外招聘公演 | 2019年10月18日～20日 | 出演・スタッフ:カンパニー ルーブリエ | 目標値 | 1,020 |
| | | 世田谷パブリックシアター | | 実績値 | 832 |
| 6 | 戯曲リーディング | 2019年10月29日、31日 | 作品名:『アテネのタイモン』 演出:野村萬斎 出演:野村萬斎 他 | 目標値 | 510 |
| | | シアターラム | | 実績値 | 409 |
| 7 | 爆笑寄席●てやん亭 | 2020年1月18日 | 出演:春風亭昇太、立川談春、林家彦いち、春風亭昇りん | 目標値 | 440 |
| | | 世田谷パブリックシアター | | 実績値 | 588 |
| 8 | 森新太郎演出作品 | 2020年1月27日～2月16日 | 作品名:『メアリ・スチュアート』 出演:長谷川京子、シルビア・クラブ、三浦涼介、吉田栄作 他 | 目標値 | 10,166 |
| | | 世田谷パブリックシアター | | 実績値 | 7,689 |
| 9 | 海外招聘ダンス公演 | 2020年3月19日～21日 | ピーピング・トムの新作公演『マザー』 ※コロナウイルスの影響により中止 | 目標値 | 900 |
| | | 世田谷パブリックシアター | | 実績値 | — |
| 10 | シアターラム ネクスト・ジェネレーション | 2019年12月4日～8日 | 作品名:『ミー・アット・ザ・ズー』 作・演出:山崎彬 出演:悪い芝居 他 | 目標値 | 1,120 |
| | | シアターラム | | 実績値 | 1,312 |
| 11 | 舞台技術養成講座 | 2019年5月9日～12日 | 講師:熊谷明人、柘植幸久、小笠原康雅 他 | 目標値 | 250 |
| | | 世田谷パブリックシアター | | 実績値 | 158 |
| 12 | 移動劇場 @ホーム公演 | 2019年6月6日～18日 | 脚本・演出:ノゾエ征爾 出演:山本光洋、たにぐちいくこ、高橋英希、ノゾエ征爾 | 目標値 | 950 |
| | | 世田谷区内福祉施設等 | | 実績値 | 1,050 |
| 13 | せたがやこどもプロジェクト 子どもとおとなのための ◎読み聞かせ『お話の森』 | 2019年8月3日、4日 | 出演:ROLLY、片桐仁 | 目標値 | 1,000 |
| | | シアターラム | | 実績値 | 940 |

| 番号 | 事業名 | 主な実施日程 | 概要 (演目、主な出演者、スタッフ等) | 入場者・参加者数 | |
|----|---|------------------------|--------------------------------------|----------|-------|
| | | 主な実施会場 | | 目標値 | 実績値 |
| 14 | せたがやこどもプロジェクト 『Jazz for Kids』 | 2019年8月17日～ 18日 | 出演：日野皓正、Dream Jazz Band 他 | 目標値 | 900 |
| | | 世田谷パブリック シアター | | 実績値 | 793 |
| 15 | 地域の物語 | 2020年1月～3月 | ※コロナウイルスの影響により、発表会中止。無観客で記録映像撮影のみ実施。 | 目標値 | 620 |
| | | シアター tram 他 | | 実績値 | 28 |
| 16 | こどものための WS「世田谷 パブリックシアター演劇部」 「夏休みワークショップ」 | 2019年7月～12月 | 小学生、中学生、高校生向けのワークショ ップを実施。 | 目標値 | 250 |
| | | 世田谷パブリック シアター 稽古場 他 | | 実績値 | 168 |
| 17 | 学校のための WS 「ワークショップ巡回団」 | 2019年4月～ 2020年2月 | ※新型コロナウイルスの影響により3月の ワークショップを中止。 | 目標値 | 4,500 |
| | | 世田谷区内小中学校 | | 実績値 | 7,830 |
| 18 | 観客育成プログラム 「舞台芸術のクリティック」 | 2019年7月～12月 | 演劇やダンスの批評を実践。 | 目標値 | 160 |
| | | 世田谷文化生活 情報センター | | 実績値 | 47 |
| 19 | 世田谷パブリックシアター 事業評価に関する調査 | 通年 | 外部機関による、劇場運営および事業評 価のための調査を実施。 | 目標値 | — |
| | | — | | 実績値 | — |

(4) 平成30年度実施事業一覧

| 番号 | 事業名 | 主な実施日程 | 概要 (演目、主な出演者、スタッフ等) | 入場者・参加者数 | |
|----|------------------------------------|-------------------------------|---|----------|---------|
| | | 主な実施会場 | | 目標値 | 実績値 |
| 1 | フリーステージ | 2018年4月29日、 30日、5月4日、6日 | 出演：世田谷区民を中心とした 約65団体 | 目標値 | 2,300 |
| | | 世田谷パブリック シアター・シアターラム | | 実績値 | 3,352 |
| 2 | 狂言劇場 | 2018年6月22日～24 日、6月29日～7月1日 | 演目：『附子』『鷹姫』『檜山節考』他 出演：野村万作、野村萬斎 他 | 目標値 | 2,250 |
| | | 世田谷パブリック シアター | | 実績値 | 3,166 |
| 3 | せたがやこどもプロジェクト ダンスワークショップ | 2018年7月21日～ 8月20日 | 講師：井出茂太、目黒陽介、斉藤美音子 他 | 目標値 | 80 |
| | | 世田谷パブリックシアター - 稽古場 他 | | 実績値 | 38 |
| 4 | 世田谷アートタウン 三茶 de 大道芸 | 2018年10月20日、 21日 | 出演：海外・国内のパフォーマー48組 | 目標値 | 200,000 |
| | | 三軒茶屋周辺、 近隣商店街 | | 実績値 | 198,000 |
| 5 | 世田谷アートタウン 海外招聘公演 | 2018年10月19日～ 21日 | 出演・スタッフ：サーカス シルクール | 目標値 | 1,060 |
| | | 世田谷パブリック シアター | | 実績値 | 1,177 |
| 6 | 現代能楽集区 | 2018年10月5日～ 17日 | 演出：小野寺修司 出演：小林聡美、貴地谷しほり 他 | 目標値 | 2,300 |
| | | シアターラム | | 実績値 | 3,001 |
| 7 | 森新太郎演出作品 『The Silver Tassie 銀杯』 | 2018年11月9日～ 11月25日 | 演出：森新太郎 出演：中山優馬、矢田悠祐 他 | 目標値 | 10,369 |
| | | 世田谷パブリック シアター | | 実績値 | 6,340 |
| 8 | 戯曲リーディング | 2018年12月3日～ 9日 | 作品名：『イザ』 演出：小山ゆうな 出演：北乃きい、篠山輝信 | 目標値 | 450 |
| | | シアターラム | | 実績値 | 385 |
| 9 | 爆笑寄席●てやん亭 | 2019年1月18日 | 出演：林家木久扇、林家木久蔵 他 | 目標値 | 350 |
| | | 世田谷パブリック シアター | | 実績値 | 630 |
| 10 | 栗山民也演出作品 『チャイメリカ』 | 2019年2月3日～ 24日 | 出演：田中圭、満島真之介、 倉科カナ、眞島秀和 他 | 目標値 | 8,800 |
| | | 世田谷パブリック シアター | | 実績値 | 14,071 |
| 11 | 小川絵梨子演出作品 『熱帯樹』 | 2019年2月17日～ 3月8日 | 作：三島由紀夫 出演：林遣都、岡本玲、栗田桃子 他 | 目標値 | 3,400 |
| | | シアターラム | | 実績値 | 4,976 |
| 12 | 海外招聘舞踊公演 ストップギャップ | 2019年3月8日、9日 | 出演・スタッフ：ストップギャップ | 目標値 | 600 |
| | | 世田谷パブリック シアター | | 実績値 | 601 |
| 13 | シアターラム ネクスト・ジェネレーション | 2019年11月29日～12 月2日 | 『青いプロペラ』 作：南出謙吾 演出：森田あや 出演：らまのだ 他 | 目標値 | 700 |
| | | シアターラム | | 実績値 | 904 |

| 番号 | 事業名 | 主な実施日程 | 概要 (演目、主な出演者、スタッフ等) | 入場者・参加者数 | |
|----|--|-------------------------------|---|----------|-----|
| | | 主な実施会場 | | 目標値 | 実績値 |
| 14 | 中学生演劇支援 | 2018年10月～ 11月4日 | 世田谷区立中学校演劇部合同発表会を劇場スタッフが支援した。 | 目標値 | 300 |
| | | 成城ホール 他 | | 実績値 | 490 |
| 15 | ダンス食堂 | 2019年1月15日、 2月5日 | 講師：勝山康晴、平山素子 | 目標値 | 105 |
| | | 世田谷文化生活 情報センター | | 実績値 | 29 |
| 16 | Technical Theatre Training Program 2018 舞台技術養成講座 | 2018年5月10日～13 日、10月26日～28日 | 講師：熊谷明人、 柘植幸久、小笠原康雅 他 | 目標値 | 250 |
| | | 世田谷パブリック シアター | | 実績値 | 226 |
| 17 | 移動劇場 @ホーム公演 | 2018年4月20日～ 5月13日 | 脚本・演出：ノゾエ征爾 出演：山本光洋、たにぐちいくこ、 井本洋平、田中馨、ノゾエ征爾 | 目標値 | 900 |
| | | 世田谷区内福祉施設等 | | 実績値 | 850 |
| 18 | せたがや子どもプロジェクト 子どもとおとなのための ◎読み聞かせ『お話の森』 | 2018年8月4日、5日 | 出演：ROLLY、片桐仁 | 目標値 | 720 |
| | | シアタートラム | | 実績値 | 954 |
| 19 | せたがや子どもプロジェクト 『Jazz for Kids』 | 2018年8月18日、19日 | 出演：日野皓正、Dream Jazz Band 他 | 目標値 | 800 |
| | | 世田谷パブリック シアター | | 実績値 | 825 |
| 20 | 地域の物語 | 2018年6月～ 2019年3月17日 | 地域住民とシンガポールのネセサリース テージによる共同制作を行った。 | 目標値 | 75 |
| | | シアタートラム 他 | | 実績値 | 342 |

2. 自己評価

(1) 妥当性 (平成30～令和2年度 3か年分)

自己評価

事業計画に必要な構成要素が有機的に連関し、当初の予定通りに事業が実施できたか。

当劇場が位置する世田谷区は、区民の文化・芸術に対する関心が高く、演奏会や演劇・展覧会の鑑賞を日常的におこなっている区民が約3割存在する。区では2018～21年を対象とした「第3期文化・芸術振興計画」を策定し、こうしたニーズに対応している。また、コミュニティにおける多様性が急速に進行しており、在住外国人数の急増や独居高齢者の増加による高齢者の孤立など、新たな問題に直面していることから、区では2019～23年度を計画期間とする「多文化共生プラン」、2021～23年度を計画期間とする「高齢者保健福祉計画・介護保険事業計画」の策定など、こうした問題への取り組みも進めている。

こうした背景を踏まえて企画した「世田谷パブリックシアター劇場・地域の文化芸術振興事業」プロジェクトでは、「誰もが文化・芸術に親しむ」、「文化・芸術をつなぎ、育てる」、「地域の文化・芸術を継承し、創造する」、「子どもや青少年の創造性を育む」、「文化・芸術をコミュニティに活かし、広げる」の5つのミッションを掲げ、事業を実施した。

プロジェクトにおける「インプット」となったのは、設置主体である世田谷区からの補助金、劇場・音楽堂等機能強化推進事業助成金、その他各種財団・基金等からの助成金、寄付金、事業運営収入からなる事業実施資金および劇場が有する専門的人材である。

これを受け、各年度において以下の「アクション」「アウトプット」を展開した。

1. 公演事業 (アクション：アウトプットの順。以下同)

- (1) 多彩で上質な作品創造：日本の劇作家による新作や上演機会が限られてきた名作、さらには最先端の翻訳戯曲など、多彩な舞台芸術作品を制作し、上演した。詳細は「創造性」の項目で論じるが、すべての年度で各種演劇賞を受賞するなど、高い評価を得ることができた。しかし、令和2年度には1本が新型コロナウイルス感染症拡大の影響によって中止となったほか、2本は客席数を50%に制限して実施せざるを得なくなった。
- (2) 海外招聘の充実：平成30年度、31年度は各2本、令和2年度は4本の海外招聘公演を予定していたが、新型コロナの影響で平成31年度1本、令和2年度は4本すべてが中止となった。これは「オリンピック・パラリンピックを契機として文化芸術の機運を盛り上げ、以降も継続して国民の文化芸術に対する意識を向上させる」というアウトカム発現を目指したものであったが、最後の段階で大きくつまづいたといわざるを得ない。
- (3) 子ども向けプログラムの集中開催：毎年夏休みの時期に「せたがや子どもプロジェクト」と題して子ども向けプログラムを集中的に実施した。『Jazz for Kids』、『お話の森』という恒例企画を軸に、コンドルズによる新作公演（平成31年度事業番号#3、以下本文中カッコ内 “#” 数字は事業番号）、春風亭一之輔プロデュースによる新寄席企画（令和2年度#8）など、新鮮で時宜をとらえた企画を取り入れることで、固定客を確立するとともに新しい観客を呼び込む工夫をおこなった。
- (4) フェスティバルを通じた地域コミュニティへの貢献：秋の恒例行事として、地域の商店街と協働して「世田谷アートタウン 三茶 de 大道芸」を実施した。月1回程度の頻度で開催している実行委員会は地域の商店街が一堂に会する貴重な機会となっており、実行委員会開催後に商店街同士の連絡会が開催されるなど、フェスティバルを共に運営することが地域コミュニティの強化に大きく貢献している。令和2年度は通常形式での実施が不可能となったが、このような機能・機会を維持するためにも会場や内容を変更して実施した。
- (5) バリアフリー・多言語対応の充実：補助金を活用し、障がい者を対象とした各種鑑賞支援や非日本語話者向けの多言語発信を拡充した。バリアフリー対応では、特に「創造性」の項目で詳述する新しい試みに積極的に取り組んだ。

- (6) 廉価な料金設定：「効率性」の項目で詳述するように、本補助金および協賛金等を活用することで最低料金を安価に抑え、補助対象事業の料金の平均額を廉価に設定することができた。

2. 普及啓発事業

- (1) 幅広い対象に向けたレクチャー、ワークショップ：幅広い年代に向けてそれぞれの年齢に合わせた内容で実施する「夏休みワークショップ」（平成31年度、令和2年度）や中学生を対象に長期間実施する「中学生演劇支援/演劇部」（全年度）、学校に赴いて実施する「ワークショップ巡回団」を実施した。さらに、長期休暇明けに児童・生徒の自殺が増加するといういわゆる「9月1日問題」に対応するため、学校に行きたくない子どもたちに呼びかけて劇場で共に過ごすワークショップなど、地域社会におけるニーズに敏感に対応した企画をおこなった。
- (2) コミュニティ・シアターの新しい試み：劇場開設以来継続している「地域の物語」では、海外との共同作業に取り組んだ。国際共同制作のほとんどが公演事業に集中する中、コミュニティ・シアターでの共同作業は非常にユニークな試みとなったと思われる。令和2年度は、劇場近隣の団地を舞台とした新しい共同作業を開始する予定であったが、新型コロナウイルスの影響で海外との共同作業については断念せざるを得なかった。
- (3) 区民の表現・発表の機会提供：作品を観る場所としてだけでなく、自らが表現をおこなう場として劇場をとらえていただくため、区民による文化活動の成果発表の場「フリーステージ」を全年度開催した。しかし、令和2年度は新型コロナウイルスの影響で中止せざるを得ず、貴重な機会が失われる状況となっている。参加予定だった団体には次年度の優先参加の権利を提供し、これまで培ってきた劇場と区民との関係が途切れないように留意した。
- (4) 劇場に足を運べない方に向けた移動演劇の提供：特別養護老人ホームなどの高齢者施設や障がい者施設などで上演をおこなう「@ホーム公演」を実施。上演を望む声が非常に多く、平成31年度は会場を前年度から増やして実施。令和2年度は新型コロナウイルスの影響で中止となったが、出演者が入居者に語りかける特製DVDを制作し、楽しみにしてくださっている方々に届けるなど、そのような状況下でもミッションを達成するための努力をおこなった。

3. 人材養成事業

- (1) 若手実演家の発掘・育成：劇場の全面的なバックアップによって、公募で選ばれた若手劇団にシアターラムでの上演機会を提供する「ネクストジェネレーション」を全年度実施。詳細は「創造性」の項目で述べるが、各団体がそれまでの殻を破る作品を創作する機会となっている。
- (2) 観客の育成・生涯芸術学習への貢献：ともすれば「難しそう」との印象を与えるコンテンポラリーダンスへの入り口を提供し、親しみやすいものとしていく「ダンス食堂」（平成30年度）や世田谷パブリックシアターが制作した作品を題材に演劇批評をおこなう「舞台芸術のクリティック」（平成31年度、令和2年度）を企画した。舞台芸術をより深く理解するきっかけを提供し、広く舞台芸術を鑑賞いただくことにより、当劇場にとどまらない観客育成につなげていくことを目指した。しかし、令和2年度はコロナの影響ですべて中止とせざるを得なかった。
- (3) 技術者の育成、全国的なネットワークの構築支援：平成30年にフルハーネス型安全帯使用作業特別教育が義務化されるなどの安全面での大きな変更や、働き方改革に伴う業務の効率化の要請など、時代の流れに迅速に対応したカリキュラムによる「舞台技術講座」を全年度実施した。令和2年度は参加者の密を避けるために2つの劇場を同時に使用して開催するなど、感染症予防のために万全の対策をとった。

上記のようなアクション・アウトプットにより、当劇場のミッションの実現に向けたアウトカムの発現を得られた。それぞれのミッションに資するアクション・アウトカムは以下のとおりである。

| | |
|------------------------|-----------------------------|
| 「誰もが文化・芸術に親しむ」 | : 1. (1) (2) (5) (6)、2. (4) |
| 「文化・芸術をつなぎ、育てる」 | : 2. (1) (3) |
| 「地域の文化・芸術を継承し、創造する」 | : 3. (1) (2) (3) |
| 「子どもや青少年の創造性を育む」 | : 1. (3)、2. (1) |
| 「文化・芸術をコミュニティに活かし、広げる」 | : 1. (4)、2. (2) |

特筆すべき事項として、区の「多文化共生プラン」に沿う形で、劇場という身近な場所に異なる文化的背景を持つ人々を呼び込み、出会う機会を作ったことがあげられる。公演事業においては、主に在住外国人をターゲットとした多言語による情報発信や字幕提供に力を入れた。提供する内容や広報の方法についてはなお検討が必要だが、近隣の大学への働きかけなど、新しい展開を図っていきたいと考えている。また、普及啓発事業においては、ワークショップに留学生を中心とした在住外国人の参加を得たほか、シンガポールの人々と直接交流し、演劇を通じてともに考える機会を持つことができた。

しかしながら、上述の内容から明らかなどおり、平成 31 年度末からの新型コロナウイルス感染の拡大による影響は甚大であり、予定通りの事業実施は不可能な状況となった。事業の中止や縮小が相次ぎ、劇場の存続自体が危ぶまれかねない危機的な状態が続いている。当劇場としては、そのような中でも劇場のミッションを達成すべく、さまざまな工夫を重ねたが、3 年にわたる総合支援の総仕上げをするべき年にこのような事態となったことは極めて残念である。

助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。

・ 文化的意義

公演事業については、「創造性」の項目で述べる通り、全年度において作品が各種演劇賞を受賞するなど、高い評価を得たことは、当劇場の創造活動が日本の文化水準を向上させている一つの証左となっていると考える。

特に、令和 2 年度は上演にこぎつけることができた『殺意 (ストリップショウ)』(#5)、『エレファント・マン』(#12)、『現代能楽集 X』(#14)のすべての作品が受賞対象となった。コロナ禍の中で課せられる様々な制約を一つ一つ克服しながら制作した作品すべてが高い評価を得たことは、当劇場の底力を示すものであったと考える。

・ 社会的意義

普及啓発事業においては、劇場が多様性を増す地域コミュニティのメンバーにとっての「居場所」となることを目指した。いわゆる「9 月 1 日問題」に対応するために実施した、引きこもりの児童・生徒を対象としたワークショップはその一例であり、新聞等でも広く取り上げられた。

毎年実施している「地域の物語」コミュニティ・シアター事業は、本事業の意義を「演劇を通じてコミュニティを作り直すこと」と再定義し、性的マイノリティや在住外国人など、社会の中で少なからず「生きづらさ」を感じている方々に積極的に参加を呼び掛けた。

・ 経済的意義

ニッセイ基礎研究所による劇場事業評価に関する調査によれば、平成 31 年度の当劇場の経済波及効果は合計約 41.9 億円 (管理運営・事業=約 15 億 1 千万円、観客消費支出=約 26 億 8 千万円) である。生産誘発係数は全体で 1.44 であり、地域にとって大きな経済的意義を有していると考えられる。

(2) 有効性 (平成30～令和2年度 3か年分)

自己評価

目標を達成し、アウトカムが発現したか。

「妥当性」の項目において述べたインプットを用いることで、各事業ごとに設定したアウトカムの発現を得た。

1. 公演事業

「時代を反映するオリジナリティあふれる舞台作品の創造、東京オリンピックを契機とした文化芸術に対する意識の向上」をアウトカムとし、達成の指標として、(1)年間5～6作品、(2)国際交流年間2作品以上、(3)平均入場者率75%を設定した。

平成30年度

- (1) 大型主催公演としては6作品(補助対象5作品)を制作し、目標を達成した。また(2)国際交流公演として2作品を招聘するとともに、「地域の物語」では長期にわたって海外の参加者と交流する新しい試みをおこなった。
- (3) 補助対象公演事業の平均入場者率は82.0%で目標を達成した。平成29年度と比較すると、平均入場者率は3%低下したが、事業ごとの入場者率を見ると、90%を超える公演数が増加している一方で、75%未満の公演数も増えている。集客を見込める公演については確実に入場者を確保する一方、実験的な作品はリスクを負っても実施する方針の結果としての数値となったものと思われる。また、広報・営業努力もあり、チケット単価は前年度と同水準を維持しつつ、収益率は改善している。

平成31年度

- (1) 大型主催公演としては6作品(補助対象2作品)を制作した。ただし、1作品はコロナの影響で中止となった。(2)国際交流公演としては2作品の招聘を企画したが、こちらもコロナの影響で1作品のみ実現した。また、「地域の物語」では昨年度に引き続き海外との共同作業を実施したが、発表会への海外からの参加は断念せざるを得なかった。
- (3) 補助対象公演事業の平均入場者率は74.1%に留まり目標に僅かに届かなかった。これは、チケット収入が見込まれる公演事業はあえて補助対象外とし、収入面では苦戦が予想されるものの、大きな意義が認められる事業に補助金を集中的に充てるというメリハリをつけた申請をおこなったことが大きな理由である。観客層の拡大を目指して若者向けの企画に注力した結果、主催公演で実施したアンケートで20代以下の来場者は全体の20.8%と大きな伸びを示した。

令和2年度

- (1) 大型主催公演としては5作品(補助対象4作品)を制作した。ただし、1作品はコロナの影響で中止となった。(2)国際交流公演としては5作品の招聘(補助対象4作品、うち1作品は昨年度中に中止が決定したため取り下げ)を企画したが、コロナの影響ですべて中止となった。
- (3) 補助対象公演事業の平均入場者率は77.6%で目標を達成した。しかし、緊急事態宣言やまん延防止等重点措置の発出によって突然座席数が制限されたり、観客の間に自粛ムードが広まったことから一部公演を除き集客に苦戦するなど、極めて難しいかじ取りを迫られた。

平成 31 年度末以降はコロナによる甚大な影響があり、アウトカムの発現が困難になったといわざるを得ない。特に「東京オリンピックを契機とした文化芸術に対する意識の向上」を目指して企画した海外招聘公演が壊滅状態となったことは深刻であった。

しかしながら、そのような中でも翻訳家の小田島則子が 2020 年の舞台芸術を代表する団体として当劇場を選び、理由として「人の生き様を舞台に乗せる企画・制作の確かさ」をあげていたことは、当劇場が時代を反映する作品を提供できていることの証左であり、一定のアウトカムの発現を得ることができたと考えている。

2. 普及啓発事業

「劇場の魅力をたくさんの人に伝え劇場の必要性を認識してもらい、地域と文化芸術の振興を促進すること」をアウトカムとし、(1) ワークショップ・レクチャー事業数年間 40 件、(2) のべ参加者数 12,000 人以上、(3) 地域と協働したフェスティバル型の事業は来場者数 20 万人を指標とした。

平成 30 年度

(1) ワークショップ・レクチャーは事業数 58 件、延べ参加者数 18,146 人の実績を上げるとともに、(2) 地域団体参加型事業である「フリーステージ」(#1) では 65 団体が参加し、いずれも目標を達成した。(3) 地域と協働したフェスティバル型事業である「三茶 de 大道芸」(#4) の来場者は 198,000 人で目標にわずかに届かなかったが、その大きな要因は降雨であった。

平成 31 年度

(1) ワークショップ・レクチャーは事業数 52 件、延べ参加者数 19,109 人であった。(2) に該当する「フリーステージ」(#1) は 64 団体が参加し、いずれも目標を達成した。(3) にあたる「三茶 de 大道芸」(#4) は来場者 200,000 人となり、目標を達成した。

令和 2 年度

(1) ワークショップ・レクチャーは事業数 90 件、延べ参加者数 2,826 人であった。ワークショップについては、参加者の密を避けるために 1 回あたりの参加者数を通常の 1/3~1/2 程度とし回数を増やして実施した。しかし、レクチャーは中止となったこともあり、参加者数は大幅に減少した。(2) に該当する「フリーステージ」は新型コロナの影響で中止（年度開始前に中止決定のため取り下げ）。(3) にあたる「三茶 de 大道芸」(#10) は劇場において席数を制限して実施したことから観客数は 347 名にとどまった。「妥当性」の項目で述べた通り、地域のカウンターパートとの関係性を維持するため、どのような形であっても実施することを最優先とした。

様々なワークショップ・レクチャー事業を実施することで、多様なコミュニティの構成員の「居場所」としての劇場の必要性を認識していただくことができたと考える。普及啓発事業においてもコロナの影響は甚大であったが、2020 年 6 月に劇場が再開するといち早くワークショップ事業を再開し、さまざまな試行錯誤を続けながら感染症対策として直接的な接触や大声を避けて実施するための知見を蓄積した。その内容は出版物として取りまとめ、広く共有できるようにした。

3. 人材養成事業

「育成した人材による文化芸術全体のレベル向上または次世代の土壌形成への貢献」をアウトカムとし、年間を通じて実施する観客または専門家育成のためのプログラムやレクチャーの参加者数のべ500人を指標とした。

平成30年度

観客・専門家育成プログラム全体では延べ759人の参加者を集め、目標を達成した。「シアタートラム ネクスト・ジェネレーション」(#13)は「らまのだ」による『青いプロペラ』を上演し、観客数は904名であった。

平成31年度

観客・専門家育成プログラム全体の参加者は846人で目標を達成した。「シアタートラム ネクスト・ジェネレーション」(#10)は「悪い芝居」による『ミー・アット・ザ・ズー』を上演し、観客数は1,312名であった。

令和2年度

コロナの影響で「舞台芸術のクリティック」(#20)を中止した影響が大きく、「舞台技術講座」(#15)も人数を制限しての開催としたことから171人の参加にとどまった。「シアタートラム ネクスト・ジェネレーション」(#13)は「パンチェッタ」による『un』を上演し、観客数は744名であった。上演時期(2020年11月下旬)は感染症の再拡大がみられた時期でもあり、集客に苦戦した。

「舞台技術講座」では、平成30、31年度は東京以外からの参加者がアンケート有効回答者の6割近くとなり、能力向上だけでなく、参加者間のネットワーク構築に資することができた。次世代の舞台技術者同士がさらに切磋琢磨する土壌を醸成する一つのきっかけとなっていると思われる。令和2年度はコロナの影響で関東圏外からの参加はゼロとなったが、それでも4割近くが東京以外の近隣県からの参加者となっている。

また、「シアタートラム ネクスト・ジェネレーション」では、選出された団体がこれまでの殻を破り、新しい取り組みをおこなう機会となっている。平成30年度、31年度の「らまのだ」「悪い芝居」はいずれも過去に上演した作品を大幅に作り変え、新たな作品として立ち上げた。令和2年度の「パンチェッタ」は、従来は素舞台上で上演をおこなってきたが、シアタートラムでの上演にあたっては、初めて舞台美術を入れた本格的な演劇作品を創作することとなった。劇場からの資金・技術・制作の様々な側面からの支援によって可能となった上演が、これら受賞団体の活動の幅を広げる転機となっていることで、「育成した人材による文化芸術全体のレベル向上」というアウトカムの発現が見られている。

(3) 効率性 (平成30～令和2年度 3か年分)

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに実施できたか。

アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに実施できたか。

1. 事業実施期間について

平成30年度

公演事業についてはほぼすべて予定通りの期間・回数で実施した。ただし、「小川絵梨子演出作品『熱帯樹』」(#11)については、チケット売り上げが極めて好調で入手困難な状況となったため、計画よりも1回公演数を増やして実施した。

普及啓発事業、人材育成事業についてもほぼ計画通りの実施となったが、長期間にわたるワークショップについては、講師の都合等もあり、若干の日程変更をおこなっている。

平成31年度

公演事業についてはほぼすべて予定通りの期間・回数で実施した。ただし、『チック』(#2)については、うち2回を関連企画のリーディング公演に変更し、より深い作品理解を促す試みをおこなった。また、『戯曲リーディング』(#6)及び『森新太郎演出作品』については、演目確定後に仕込み等のスケジュール調整をおこなった結果、それぞれ1回、2回公演数を減らして実施した。他方、「@ホーム公演」については、ニーズが極めて大きかったことから調整の結果2回回数を増やして実施した。

なお、新型コロナの影響により「海外招聘ダンス公演」(#9)及び「地域の物語」(#15)の発表会は中止せざるを得なかった。

平成30、31年度については、最後にコロナの影響を被ったものの、ほぼ予定に沿った期間・回数で事業実施をおこなったうえで、指標として掲げた数値をほとんどすべて達成することができたことから、効率的な事業運営をおこなうことができたと考える。

令和2年度

「有効性」の項目で述べたとおり、コロナの影響で主催事業の中止が相次いだ。さらに、使用日数ベースでは年間の半分以上を占める提携公演、貸館公演も多数が中止された。提携・貸館の中止は4月～6月の緊急事態宣言発出期間が中心だったが、それ以外の期間についても、稽古期間の不足等、さまざまな理由で中止となるケースが頻発した。劇場スケジュールに予期しなかった空きが生まれることとなったことから、これを柔軟に活用することで事業の中止を防ぐとともに、公演数を増やすことでチケット収入を増加させる試みをおこなった。以下に例を示す。

「お話の森」(#6)は当初シアターラムで夏休み時期に開催予定であったが、小劇場に児童を集めることへの懸念から断念せざるを得なかった。しかしながら、10月に主劇場に空きが生まれたため、急遽時期・会場を移して実施することとした。空間が大きく変わることから、演出や内容を一部修正し、変更によって事業の効果が減ざることがないように最大限の配慮をおこなった。

また、例年近隣の各商店街に設置した特設会場に約20万人の観客を集めて開催している「三茶 de 大道芸」(#10)については、同時期に計画していた海外招聘公演が中止となったために空きが生まれた主劇場を会場とし、観客数を制限して実施することとした。また、劇場でご覧いただけない観客向けにオンライン配信も実施した。開催することで地域との連携を保ち、「文化・芸術をコミュニティに活かし、広げる」という劇場のミッションに資することを最優先として事業を実施したが、課題も多く残された。無料で配布したチケットはすべて事前予約済み

となったが、当日、実際に来場する観客数は伸び悩んだ。また、オンライン配信の視聴数も 97 回と大きな広がりが見られなかった。

このような形態で再び実施することはないと思われるが、生じた問題については検証をおこない、どのような形で開催となっても改善を図れるようにしたい。

さらに、「森新太郎演出作品」(#12)については当初予定の 20 回を大幅に延長し、全 31 回公演とした。これは、直後に予定していた地方公演が中止となったこと、同時期に主劇場で予定されていた貸館公演が中止となり劇場に空きが生まれたことという複数の条件が重なったことから可能となったものである。その際には、100%、75%、50%、無観客と数パターンの客席制限を想定してシミュレーションをおこない、延長することにより事業単位での赤字を圧縮できる可能性が高いと思われたことから変更をおこなうこととしたが、最悪の場合には延長することで赤字が増大する可能性もあり、綱渡りの判断が求められた。

2. 収支予算について

チケット料金については、「公共劇場ならではの廉価な料金設定により多くの一般観客や次世代を担う若年層にも広く観劇の機会を提供する」という目的を達成すべく設定している。

平成 30 年度

補助対象事業の料金の平均額は、演劇で最高額が 5,514 円、最低額が 1,857 円であった。当劇場にて提携および貸館として実施した公演の平均額はそれぞれ 6,771 円、4,441 円であり、補助対象事業のチケット料金を廉価に設定することができた。ダンス公演、音楽公演についても同様の結果となった。

ただし、入場料等収入については、公演内容が固まっていない段階では予測が難しい部分があり、当初予定額を下回る事業が出る一方で「小川絵梨子演出作品『熱帯樹』」(#11)では予定額を上回る結果となった。

平成 31 年度

補助対象事業の料金の平均額は、演劇で最高額が 4,329 円、最低額が 1,450 円であった。当劇場にて提携および貸館として実施した公演の平均額はそれぞれ 6,444 円、4,017 円であり、補助対象事業のチケット料金を廉価に設定することができた。ダンス公演、音楽公演についてもほぼ同様の結果となった。

入場料等収入については、「森新太郎演出作品」(#8)については当初予定額を下回る結果となった。上演時期はすでにコロナ感染が広まりつつあった時期であり、劇場に来ることを控える観客がいたことが一つの要因であったと考えられる。

全体として、補助対象事業においては本補助金および協賛金等を活用することで最低料金を安価に抑えることが可能となっており、子どもや高校生・大学生を対象とした大幅な割引料金を設定することで、「若年層に広く観劇の機会を提供する」という目的を達成することができた。

近年ではキャストिंगによってチケット売りが大きく左右される傾向が顕著であり、出演者決定後にテレビ等の影響によって当初見込みから大きく変動する事例も数多くみられる。当劇場としては、このような不確定要素があることに留意しつつ、芸術的要素とマーケティングの要素のバランスをとり、持続可能な形で「現代を反映するオリジナリティあふれる舞台作品を創造し、当劇場が発信源となり再演可能な新たなレパートリーとなる作品を拡充する」というアウトカムを発現させるための取り組みをおこなった。

令和2年度

コロナ禍の中でも、チケット料金の設定については前2年度と同様の結果となった。しかし、中止となった事業については収入がない中で出演者・スタッフへの補償をおこなうとともに、実施する事業についても客席制限による収入減のリスクヘッジをおこなう必要が生じた。

当劇場においては、主催事業について原則として客席数50%を前提として各事業の予算を組みなおして経費の節減に努めることとし、それでも当然に予想される赤字については、コロナ禍の中で導入された各種補助金等にも積極的に申請をおこなうことで可能な限り補填を試みることを方針とした。

特に大きな影響が予想される大型演劇公演については、経済産業省の J-LODlive 補助金への申請をおこなった。客席数50%での開催を余儀なくされた『殺意（ストリップショウ）』（#5）については、J-LODlive に採択されたものの、事業単位では赤字となった。他方、「森新太郎演出作品」（#12）については、J-LODlive に申請しつつ先述のとおり期間・回数を延長して実施したが、その期間は100%以下での開催が可能であったことから、収入が予想よりも大きくなる結果となった。

このように、先の見えない中で最大限のリスクヘッジをおこないつつ事業運営をおこなった結果、客席制限の状況次第で収支に大きな影響が及ぶという綱渡りの状況が劇場運営面でも発生した。

(4) 創造性 (平成30～令和2年度 3か年分)

自己評価

事業計画の内容が、独創性、新規性、先導性等に優れている (と認められる) か。

1. 劇場・音楽堂等を象徴する人物、鍵となる人物 (キーパーソン) の存在

当劇場の芸術監督を務める野村萬斎は、劇場について「世田谷を中心に地域を同心円的に拡がりのある、時代を写す鏡のような劇場にしたい」と述べている。地域に根差した「このあたりのもの」という狂言の特質、伝統芸能という「日本」を最も体現する舞台芸術を受け継ぐものとしての大きなビジョン、さらにそれをオリンピック・パラリンピック開閉会式へとつなげることを期待されたダイナミズム。野村萬斎自身が「同心円」を体現するアーティストであるといえる。

これを当劇場に当てはめれば、区立の施設という特性から「地域」に軸足を置きながら、「日本」を代表する作品を創造し、「世界」とつながるといふ、ダイナミックな公共劇場のイメージ・モデルの確立を目指しているものであると解することができる。

世田谷パブリックシアターは、あくまでも世田谷区の施設であり、区民へのベネフィット還元が求められている。これは「ミッション」にも明らかな視点である。しかし、それを基本に置きつつ、そこだけに収まらず、「日本」「世界」へと視点を広げることによって、劇場の活動が悪い意味で地域に特化し、矮小化することを防いでいる。この点こそが野村萬斎芸術監督の最大の影響であると思われる。

野村萬斎が芸術監督に就任して20年近くになるが、地域社会の多様性が増大し、コロナ禍の中で複雑性が加速する現在こそ、実は同芸術監督の存在意義が最大化されている時期なのではないかと思われる。

「同心円」の広がり、当劇場の事業計画の根幹となっており、各事業は同心円の広がりを意識しつつデザインされ、独創性、新規性、先導性を発揮している。事業計画の3本の柱となっている「公演事業」「普及啓発事業」「人材養成事業」のそれぞれにおける例を以下に示す。

(1) 日本及び世界の最先端の舞台芸術の創造・紹介 (公演事業)

a) 日本を代表する劇作家・演出家による新作の創造や、b) 多様な翻訳戯曲の上演、さらにc) 世界各地の舞台の招聘を組み合わせることで、「同心円」のそれぞれにおける最先端の舞台芸術の鑑賞体験を提供した。

a) 日本の実演家による新作の収穫の例としては、野村萬斎自らが監修した「現代能楽集」シリーズ (平成30年度、令和2年度) があげられる。平成30年度の「IX」(#6) では「竹取物語」のストーリーを、演出の小野寺修二がマイムやダンスのムーブメントを取り入れた作品として再構成した。参加アーティストも詩人、俳優、能楽師、ダンサー、ミュージシャンと多様で、「能にある『見立て』の考え方を生かして、物語の筋を追うのではなく、その世界観を身体や言葉を使って表現したい」という小野寺の意図を反映した斬新な作品となった。他方、令和2年度の「X」(#14) は能「道成寺」と「隅田川」をモチーフに、瀬戸山美咲、長田育恵という若手二人の書き下ろし戯曲を上演した。熟練のキャストによるストレートプレイであり、重厚かつ透明な世界観が後述のような高い評価を得た。「古典の魅力を現代に還元する」という野村萬斎による基本コンセプトを共有しながらも全く異なる作品として結実する奥行きが、当劇場の独創性であると考えられる。

b) 翻訳戯曲の上演としては森新太郎演出『The Silver Tassie 銀杯』、『メアリ・スチュアート』、『エレファント・マン』 (それぞれ平成30年度#7、31年度#8、令和2年度#12)、小山ゆうな演出『チック』 (平成31年度#2)、白井晃演出『ある馬の物語』 (令和2年度#4、コロナの影響により中止) があげられる。『The Silver Tassie 銀杯』はこれまで日本での上演実績のなかった戦前の作品を発掘して上演。また、『メアリ・スチュアート』は上演

機会の多いダーチャ・マライーニによる二人芝居版ではなく、フリードリヒ・シラーによる群像劇を取り上げるなど、日の当たることの少ない良質な作品を取り上げて紹介する公共劇場ならではの企画となった。

c) 海外からの招聘公演としては、特に現代サーカスに力を入れ、毎年秋の「世田谷アートタウン 三茶 de 大道芸」の時期に合わせて開催することで、街中で大道芸を楽しんだ観客を劇場に呼び込む効果を狙った。また、障害の有無を超えた身体表現が高い評価を得ているイギリスのインクルーシブ・ダンス・カンパニーであるストップギャップ（平成 30 年度#12）やアメリカの聴覚障がい者による劇団デフ・ウエスト・シアター（令和 2 年度#3、コロナの影響により年度開始前に中止が決定したため取り下げ）など、多様性を体現するアーティストによる作品を積極的に紹介したことは、日本におけるこの分野の取り組みを先導するものであった。

(2) 多文化共生・多様性への寛容（公演事業）

演目だけではなく、劇場におけるバリアフリーや多言語対応においても数々の試みをおこなった。

a) 字幕タブレットによる多言語字幕

平成 30 年度に実施した「狂言劇場」(#2)においては、(株)イヤホンガイドと協働し、タブレットを用いて英語と日本語による字幕を提供した。言語を切り替えることによって英語字幕は非日本語話者に、日本語字幕は聴覚障がい者に対するサービスとして同時に利用できるため、極めて利便性が高いことが明らかとなった。また、言語を追加することも容易である。他方、コストが高く、提供する回を限定する必要性が生じることや、翻訳に時間を要するため、直前まで台本の修正が続く新作戯曲による公演では使いにくいといった問題点も認識された。

b) 演出に組み込んだ手話通訳の取り組み

聴覚障がい者向けの手話通訳は過去に実施したことがあったが、平成 31 年度に上演した『チック』(#2)とコンドルズ『Don't Stop Me Now』(#3)の 2 公演については、演出の中に手話通訳者を組み込むという新しい試みをおこなった。通常、手話通訳者は舞台端に位置して通訳をおこなうが、これらの公演においては、通訳者も衣装を着け、場面によっては出演者たちとやり取りをしながら通訳をおこなった。手話通訳者が入る回については演出や照明も特別なものとし、手話通訳者が違和感なく溶け込む工夫をした。そのための労力は極めて大きいですが、手話によるコミュニケーションが特別なものではなく、我々が通常おこなっている多様な意思疎通の方法の一つに過ぎないのだということを舞台上で明確に示すことができ、テレビ番組でも大きく取り上げられた。

令和 2 年度にも上記のような実験を踏まえた新たな展開を検討していたが、コロナ禍の中でそこまでの余裕がなかった。今後も状況を見つつ、取り組みを続けていくこととしたい。

(3) コミュニティ・シアターにおける海外との共同作業（普及啓発事業）

劇場開設以来継続しているコミュニティ・シアタープログラムである「地域の物語」では、平成 30 年度からの新しい試みとして、シンガポールとの共同作業を実施した。シンガポールは、アジアにおける先進国として、少子高齢化の急激な進行やコミュニティにおける断絶など日本と共通の課題を多く抱えている。東京とシンガポール、それぞれの住民が交流し、互いのコミュニティが抱える問題について議論することで、新しい視点を獲得しようという試みとなった。

共同作業のパートナーとなったのは、当劇場が 2002～2005 年に実施した「ホテル・グランドアジア」プロジェクトにも参画した劇団ネセサリーステージをはじめ、劇場設立以来培ってきた海外とのネットワークを通じて出会ったアーティストたちである。本事業は、これまでの劇場の取り組みを最大限に活用した極めて独自性の高いものであると考えている。

平成 30 年度（#20）は、シンガポールの高齢者劇団のメンバーとともに、老いと家族の問題について議論を重ねて演劇作品を作り、シンガポールと東京でそれぞれの成果を発表した。住民たちが自らの物語を語るという当劇場の方法論は「保守的なシンガポール社会においてはタブーとされることも多い問題にあえて取り組んでおり、他のコミュニティシアター・プロジェクトとは一線を画している」「世田谷パブリックシアターとの共同作業によって高齢者の様々な物語を引き出したことで、愛すべき作品が生まれた」と評されるなど、相手国においても大きなインパクトを残すことができた。

平成 31 年度（#15）は外国からそのコミュニティに移り住んだ人々に焦点をあてた。シンガポール側ではメイドとしてシンガポール人家庭で働くフィリピン人女性など、東京側では中国、台湾、フィリピンに出自を持つ在住外国人が参加し、国境を越えて自分の居場所を探すそれぞれの物語が語られた。東京での発表会には、シンガポールの参加者も渡航して一緒に作品を作る予定であったが、コロナの影響で中止せざるを得なくなった。

令和 2 年度（#17）は視点を変え、劇場の近くの団地（都営下馬アパート）という特定のコミュニティと密接にかかわりあいながら事業を展開する新しい手法に取り組んだ。その際、国民の約 8 割が公団住宅に住むという「団地国家」であるシンガポールにおいて、団地の住民と深くかかわりあいながらアートプロジェクトを実施している劇団ドラマボックスの手法を学び、応用する戦略を立てた。これもコロナの影響でいったんは中断しているが、状況を見つつ再開していく予定である。

このように、「同心円」で一番内側にある「地域」に特化した事業であった「地域の物語」において、一番遠い「世界」とのつながりを作ることに注力してきた。一見、一番遠くにあるものを結び付ける可能性を示すものであり、当劇場の独自性、先導性が表れていると考える。

（4）コロナ禍における演劇ワークショップの手法の開発、共有（普及啓発事業）

令和 2 年 6 月に緊急事態宣言が解除された際、真っ先に再開したのが稽古場での演劇ワークショップであった。通常、30 人程度を上限として実施するが、再開にあたっては上限を 6 名とし、マスク常時着用の上で身体接触を可能な限り避けるなど、いわゆる「3 密」を回避する具体的な方法を模索するとともに、各回終了後の消毒など、運営面でもトライアルをおこなう場と位置付けた。6 月のワークショップには、当劇場が契約しているすべての進行役に最低 4 回の機会を提供し、毎回異なる方法を試すことで知見を蓄積していった。これは、夏休み期間中に実施する小・中・高校生向けの「夏休みワークショップ」（補助対象事業）を安全に実施するために避けて通れないものであった。

ここで得られた経験をもとに、「夏休みワークショップ」においては、参加者数を小学生 8 名、中高生 10 名と設定し、内容もそれぞれの年齢に合わせたものとした。実践を通じて蓄積された知見は、他の現場においても活用いただくべく、当劇場の学芸事業広報紙『キャロマグ』の令和 2 年 12 月号の特集「コロナ禍の夏休み子どもワークショップ 2020」で広く共有した。

（5）世田谷から全国レベルにはばたく若手実演家の支援（人材養成事業）

各年度で実施した「シアター ترام・ネクスト・ジェネレーション」は、選出された各団体がそれまでの自分たちの殻を破り、世田谷から日本の演劇シーンへとにはばたく機会となっている。

平成 30 年度選出の劇団「らまのだ」の演出家はシアター ترامでの上演を目指してこれまで活動してきたと述べており、当劇場がこれまで実施してきた質の高い公演事業に対する評価が応募への強い動機づけになっていることが確認できた。同劇団はそれまで座付き作家の作品のみを上演していたが、その後の公演ではハロルド・ピンター作品を取り上げるなど新しいステップを踏み出しており、活動の幅を広げる一つの転機となったと思われる。

また、令和2年度選出の「パンチェッタ」は、「有効性」の項目で述べたとおり、本事業によって初めて本格的な舞台美術を組んでの公演を実現した。同団体を選出した審査員の一人である演出家の小野寺修二氏は「スタイルを踏襲しつつ、どう発展するのか？可能性と期待を感じます。ぐっと大きくなる空間でのチャレンジを是非観てみたい！そう思いました」と期待を表明していたが、それが実現された。単に賞を授賞するだけでなく、劇場が制作・広報を含めたあらゆる面でバックアップをおこなう本事業は、創造事業の豊富なノウハウを持つ当劇場ならではの支援策となっていると思われる。また、令和2年度は世田谷区が実施する「芸術アワード “飛翔”」と共同する形で実施し、より充実した支援を実現した。しかしながら、感染者数が増大する中で観客数が伸び悩み、成果を十分に共有できなかったことは残念である。

2. 創造活動に関わる建物設備等

当劇場の特徴として、主劇場（世田谷パブリックシアター）と小劇場（シアターラム）の二つの劇場に加え、大小3つの稽古場や作業場、音響スタジオなど、舞台芸術の創造のすべてのプロセスが完結できる設備を1か所で完備している点があげられる。さらに、専門のスタッフが常駐することで、劇場を知り尽くしたスタッフによるきめ細かな対応が可能となっている。

これは、公演事業において作品を創造する際はもとより、普及啓発事業において一般区民とともに作業をおこなう場合や、人材養成事業において若く経験の浅い実演家と創造をおこなう際に極めて大きなメリットとなる。特に、区民文化団体の発表の機会である「フリーステージ」においては、団体のメンバーが漠然と持っているイメージを具体化し、何が可能かを瞬時に提示することが求められるため、当劇場の特性が最大限に発揮されている。また、「シアターラム・ネクスト・ジェネレーション」では稽古場や作業場をフル稼働させて支援をおこなうことで、上述したような「殻を破る」公演が可能となっている。

なお、コロナ禍の状況において施設を使用する方々の安全を確保すること、さらに感染症対策のための追加作業に追われる劇場スタッフの負担を少しでも軽減することを目的とし、令和2年6月に劇場やロビー、稽古場、楽屋の全域に抗ウイルスコーティングを実施した。

自己評価

事業の実施によって、当該劇場・音楽堂等の国内外での評価の向上につなげた（と認められる）か。

1. 公演事業

平成 30 年度は、特に「チャイメリカ」(#10)「熱帯樹」(#11)は連日立ち見が出る程の盛況となった。新聞の劇評では両作品の社会的意義への評価が目立つ。また、平成 31 年度の森新太郎演出作品『メアリ・スチュアート』

(#8)についても、歴史劇としてのみとらえるのではなく、現在の状況への批判としてとらえる劇評が多く出された。令和 2 年度では、『殺意 (ストリップショウ)』(#5)や『現代能楽集 X』(#14)について、現代社会との関連でとらえる劇評が出た。このように、作品を通じて現在の社会を考え直すことが強く示唆されているのが特徴的であり、これは、演劇を通じて言説の場を生み出す「公共圏」としての役割を、当劇場が着実に果たしていることの重要な証左であると考えている。

また、先述した多文化共生に向けた取り組みについても高い評価を得ることができた。例えばイギリスのインクルーシブダンスカンパニー、ストップギャップの『エノーマスルーム』(#12)では、パフォーマンスアーツの新たな形や可能性を提唱することができたと考える。

これらの取り組みの結果、各種演劇賞を受賞したことは、当劇場の創造活動に対する客観的な評価として重要であると考えている。3 年間の受賞は以下のとおりである。

平成 30 年度

- ・『The Silver Tassie 銀杯』(#7) 読売演劇大賞・優秀男優賞(出演・横田栄司)

平成 31 年度

- ・森新太郎演出作品『メアリ・スチュアート』(#8) 小田島雄志翻訳戯曲賞

令和 2 年度

- ・『殺意 ストリップショウ』(#5) 読売演劇大賞・大賞及び最優秀女優賞(出演・鈴木杏)
紀伊国屋演劇賞・個人賞(出演・鈴木杏)
芸術選奨文部科学大臣新人賞(演劇部門)(出演・鈴木杏)
- ・森新太郎演出作品『エレファント・マン』(#12)
読売演劇大賞・杉村春子賞/優秀男優賞(出演・小瀧望)
- ・現代能楽集 X『幸福論』(#14) 読売演劇大賞・選考委員特別賞
読売演劇大賞・優秀演出家賞(演出・瀬戸山美咲)
読売演劇大賞・最優秀スタッフ賞(照明・齊藤茂男)

2. 普及啓発事業

普及啓発事業においては、平成 30 年度から開始した、子どもたちをターゲットとしたいわゆる「9 月 1 日問題」に取り組んだワークショップ事業がメディアの関心を集め、社会の中で公共劇場が果たしうる役割の可能性と重要性を強くアピールすることができた。

また、「地域の物語」においては、平成 31 年度には在住外国人の方に、そして下馬団地という特定のコミュニティを対象を絞った令和 2 年度は、特に高齢者の方々の参加を募っている。これらの活動により、劇場を「居場所」とし、彼らとコミュニティとをつなぐことを目指した。政府も 2021 年 3 月になって「孤独・孤立対策担当大臣」を置くなど、引きこもりをはじめとした、コミュニティにおける居場所を失った人々に対する支援の取り組みを本格化させつつあるが、当劇場が取り組んできたこうした活動は、社会における孤独・孤立の問題を先取りした

ものであると言える。

また、令和2年度には、高齢者からの聞き書きによる作品に加え、下馬地区在住の脳性まひの車いすライダー、実方裕二さんの人生を区内の小学生12人が演じた作品を創作した。コミュニティに住む障がい者と子どもたちを結び付け、地域において共に生きることについて考える作品となっており、こちらも大きな関心を集めた。こうした活動を積み重ねることで、当劇場が日本におけるコミュニティ・シアターの先駆者でありリーダーであるとの評価が確固たるものとなっていると思われる。

(5) 持続性（平成30～令和2年度 3か年分）

自己評価

事業計画を通じて組織活動が持続的に発展する（と認められる）か。
持続的なアウトカムの発現・定着が期待できるか。

1. 人材活用・育成

平成29年12月に「世田谷パブリックシアター劇場経営に関する基本方針」、平成30年1月には「公益財団法人せたがや文化財団人材活用計画」（以下「活用計画」）を策定し、長期的に人材を育成し、また適正に処遇することで定着を促す取り組みをおこなっている。

特に、「活用計画」に含まれる、有期契約職員を無期雇用に転換する人事制度はこの目的に照らして極めて重要である。無期雇用への転換については、(1) 有期雇用の契約職員を無期雇用の「専門職員」に昇任させる、(2) 有期雇用のマネージャー級契約職員を無期雇用の「総合職員」に転換させる、(3) 有期雇用の非常勤職員を無期雇用の「専門職員」に昇任させるという3通りの可能性を設定しているほか、有期雇用の非常勤職員については、人事考課による5回目の契約更新時に無期転換する道を開いている。

この結果、劇場が所属する世田谷文化生活情報センターにおいて過去3年間に23名の職員が無期雇用に転換した。これにより、センター職員のうち無期雇用職員は40名（全体に占める割合は61.5%）となっている（アルバイト職員を含まない）。今後も、「活用計画」の実現を図るべく、取り組みを続けていく。

2. 経営戦略（資金確保）

以下に述べるとおり、設立主体である世田谷区からの補助金のみに頼ることなく、自助努力による資金確保の努力をおこなった。

(1) 寄付金

財団全体として寄付金の確保に取り組んでいる。平成30年からクレジットカード決済を可能にし、従来財団一体で作成していた募集チラシを令和2年から事業部ごとの作成に改め、公演会場でも寄付を募る取組みを強化し効果を挙げている。令和2年には区内社会貢献団体から寄付を得て補正予算を編成し、他団体と連携して普及啓発事業に活用した。

(2) 協賛金

令和2年度には1社からの協賛が打ち切られるなど、劇場事業全体に対する協賛金の獲得は極めて難しくなっている。そのため、「24歳以下に対する割引の財源とすることで観劇のハードルを下げる」（トヨタ自動車）、「中学・高校の演劇部の生徒に観劇体験を提供する」（東邦ホールディングス）など、特定の目的を掲げて協賛いただく試みをおこなってきた。今後もそうした方向性を強化していくため、劇場側から積極的な提案をおこなう体制を作っていきたいと考えている。

また、平成31年度の「世田谷アートタウン 三茶 de 大道芸」(#4) 事業においては、近隣商店街等と組織している実行委員会において協賛部会を活性化させ、個人や小規模店舗などが小口で寄付できる応援キットを作成するなどの工夫を凝らし、全体で100万円を超える協賛金を獲得することができた。

(3) 賛助会費（友の会会費）

世田谷パブリックシアター友の会の会員数は、平成 30 年度のピーク時は 6,500 名を超え、会費収入が 2 千万円近くに達する年もあった。会員の大きな特典となっているのはチケットの優先販売であるが、公演ごとの販売枚数が限られる以上、会員数が増えるほどチケット入手が困難になり、サービスが低下する皮肉な状況が避けられない。

そのため、友の会の位置づけを見直し、いたずらに会員数の増加のみを追い求めるのではなく、会員には「劇場のサポーター」として長期的に支援をいただく方向への転換を図っている。コロナの影響により会員数は 3,200 人程度（令和 2 年度末現在）まで減少しているが、むしろこれを新しい会員サービスのあり方を考える好機としたいと考えている。

(4) 助成金等

「妥当性」の項目で触れたように、過去 3 年間は各種助成金の獲得に注力し、助成金の内容や対象に関する調査・研究や申請作業を集中的におこなう体制を作った。公的機関の助成金採択件数は平成 30 年度は 2 件にとどまったが、31 年度は 6 件、令和 2 年度は 4 件となった。助成金についても競争が激しい状況があるものの、リサーチを強化し、個別事業の内容に応じて適切な助成金への申請をおこなうことで、安定的に外部資金を確保する努力を続けている。

令和 2 年度には新型コロナウイルス感染症の拡大により、事業運営収入、特にチケット収入に多大の影響があった。令和 2 年 4 月の緊急事態宣言発出以前から主催公演は中止、7 月に公演事業を再開した後も 9 月までは 50%の客席制限が適用され、さらに令和 3 年 1 月から再度客席制限が導入されるなど、全く予測が不可能な中で事業を実施せざるを得なかったことから、「効率性」の項目で述べたとおり、リスクヘッジとして J-LODlive 等の補助金への申請を積極的に実施した。

3. PDCA サイクルの制度化（事業運営）

世田谷区の「外郭団体行動計画」に従い、PDCA サイクルを機能させるべく取り組んでいる。具体的には、各事業の計画時及び実施後に当劇場を含む文化生活情報センター幹部会（館長、副館長、各部部長、マネージャーが出席）において検討・評価をおこなう体制を確立している。

4. 連携・ネットワーク戦略

当劇場で企画制作した作品のツアー公演を実施し、各地の劇場とのネットワークを構築するとともに、質の高い作品の観賞機会を提供している。その際には文化庁の劇場・音楽堂等間ネットワーク強化事業補助金も活用している。

令和 2 年度は、新型コロナウイルスの影響でツアー公演はほぼすべて中止とせざるを得なかったが、年度末に実施した公演（補助対象外）では PCR 検査を複数回実施したうえで感染症対策を十分におこなってツアーを実施した。ここで得られた経験や知見を活用し、今後は状況を注視しつつツアー公演を再開していきたいと考えている。

また、「劇場、音楽堂等連絡協議会」「全国公立文化施設協会」等に加盟し、情報交換や新たなネットワークの構築に努めている。特に、「劇場、音楽堂等連絡協議会」については、当劇場職員が演劇舞踊部会長を務めており、加盟館に対して積極的に情報共有をおこなっている。さらに、コロナ禍の中で設立された「緊急事態舞台芸術ネットワーク」においても、当劇場職員が事務局に参加して関係諸団体との連携を図っている。

5. 施設のメンテナンス・修理

「世田谷パブリックシアター劇場経営に関する基本方針」において、年間劇場利用日数のうち保守日の占める割合を2.5割とすることを掲げたことに基づき、これまで毎年一定時期に施設のメンテナンスや修理を適時適切におこない、必要な機能を維持してきている。

一方、劇場開設から20年以上を経て、施設の経年劣化が目立つようになっている。劇場施設の設備更新については、世田谷区が策定する公共施設等総合管理計画において検討することが位置づけられているが、コロナ禍の影響等により計画が全面的に凍結・先送りされ、劇場施設の設備更新時期も不透明な状況になっている。複合ビル（キャロットタワー）内の施設であることから、共用部分についてビル全体での調整が不可欠であることも踏まえ、世田谷区及びキャロットタワー管理組合との緊密な連携のもと、引き続き計画的対応を図っていく。